

産地形成から100年余、世界へ飛躍を目指す鶴岡シルク 【鶴岡織物工業協同組合】

本邦最北の絹産地である鶴岡は産地の中で最も後進地であろう。ほとんどの産地は遅くとも江戸時代には成立しているが、鶴岡が産地として認められたのは明治も末のことである。

鶴岡の絹織物は、明治21年、3人の木綿機屋が金沢から織機と技術を導入し羽二重を織ったことから始まる。明治34年には17業者が354台の手織機を持ち、4万円の生産高があったと記録されている。

ここに齋藤外市という発明家が登場する。

彼は鶴岡近郷の豪農に生まれたが、若い頃から機械好きで、鶴岡で絹が織られ始めたことを聞き、羽二重に挑んだ。しかし、手織りの足踏機は不便で効率も上がらないので、明治25年(28才)、力織機の発明を決意した。

それから7年間、祖先代々からの家財を研究に蕩尽し、世間からは狂人扱いされながらも明治32年に特許を採択され「斉外式力織機」と命名した。早速、自ら運転し製織を始めたが、蒸気機関は、燃料が高く、スピードにムラがあり、なかなか思うほどの効率が上がらなかった。時あたかも明治33年に鶴岡に水力電気(株)が開業するや、34年に一家を挙げて鶴岡に移住し、工場を作り20台の力織機を据付け、電動力で運転した。これが絹織物を電力で製織した我が国の最初と言われている。明治36年に本格稼働を開始し一挙に30万円を生産するにいたった。

当時、鶴岡は農業と商業が主体で未だ工業的な産業はなかったため、このニュースの反響は大きく、地主や豪商の資本は一斉に絹織物に流れ、明治40年には100台以上の織機をもつ大工場も数社出現したほどである。更に外市は欧米の嗜好が軽目朱子に転じてきたことを知り、朱子用力織機を考案、また朱子がスレを出し易い欠点を防ぐため「斉外式整練

機」と整理法を発明、特許を得ている。そのため鶴岡は輸出を主とし、羽前朱子の名声は内外に発揚した。明治44年には33社、力織機数1,390台、生産高122万円、大正8年には生産高は1千万円を超え、鶴岡産地は確立された。

鶴岡産地の特徴は、最初から広幅、洋装輸出を目的とした産地だったことである。特に産地の域内に養蚕から製糸、製織、精練、染色、プリント、縫製と絹製品の生産にかかる一貫した工程が維持され活動している産地は現在では外にはない。また最初から工場、賃金形式であり、各社がリスクを持ち、自ら販売を行っている。従って産元商社がなかった等色々あるが、産地形成から100年を経過し、幾多の盛衰を経ている。これらの大変化を乗り越えて現在に至ったのは、伝統に縛られることなく新しい織物や体制に挑戦する先輩から受けついだ姿勢にあると思う。

平成20年に中小企業庁より地域資源活用プログラムの支援を受けた当組合の「きびそプロジェクト」も2年目となり、販売に向けたものづくりを進めている。平成21年9月には、より進化した成果を発表するべく、表参道のRinで「第2回鶴岡きびそ展」を開催した。来場者は600名を超え、高い評価を得たが、これは第一歩である。きびそを旗印に鶴岡シルクを世界に飛躍させていきたい。



きびそを旗印に開催した「第2回鶴岡きびそ展」



伝統に縛られることなく、常に新しい織物を追求している鶴岡シルク製品の数々

○問い合わせ先

鶴岡織物工業協同組合(田中)

住所: 山形県鶴岡市安丹字村上1-1

TEL: 0235-22-0507